

カール・マルクス

種 瀬 茂

一

カール・マルクス (Karl Marx, 1818—1883) のような巨人を、全體像としてとらえることは容易なことではない。かれの思想と理論は、人間と自然と社會を包み、いわば全歴史を一貫した體系として把握しようとするものだからである。その廣さその深さと鋭さは、私たちをひきつける。その豊かな活動力と、自由闊達な精神力は驚歎に値し、そして魅力に富んでいる。かれはその時代の状況に生きて、同時代の最もすぐれた思想をのみつくり、それを克服しながら自らの思想と理論を作り上げていった。それは辯證法的唯物論、史的唯物論、自然辯證法と呼ばれている思想と理論の遺産としてのこされたのである。

しかしながら、マルクスは完成した體系を作り上げてしまったのではないし、私たちはその體系を手に入れて適當に現實を處理すれば、すべてかたづく、という程度に安易なものではない。右のようにいえばたれもが當然のこととして承知していることがらにすぎないのであるが、このようなマルクス理解の態度に、私たちはしばしばおち入り易い。

たとえば史的唯物論についての一面的な把握を、晩年のエンゲルス (Friedrich Engels, 1820—1895) は次のように批判している。^{*} この批判はマルクスをいかに把握するかについて教訓にとんでいると思う。

* F. Engels: Brief an Joseph Bloch. 21. XI. 1890. in „Ausgewählte Briefe.“ 1934. SS. 374 f. 一八九〇年九月二一日付け、エンゲルスの J・プロッホあての手紙。(邦

譯、『マルクス・エンゲルス選集』第一五卷、五二六ページ以下、参照。

史的唯物論によれば「人間は、その生活の社會的生產において、一定の、必然的な、彼らの意志から獨立した關係に、生産關係にはいる。この生産關係は、彼らの物質的生產力の一定の發展段階に照應する。これらの生産關係の總體が社會的經濟的構造を形づくる。これが現實の土臺であつて、そのうえに法律のおよび政治的な上部構造がたち、またそれに一定の社會的意識諸形態が照應する。物質的生活の生産様式が、社會的・政治的・精神的な生活過程一般を條件づける。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に、彼らの社會的存在が彼らの意識を規定するのである。」^{*}このような基本的原理は單に受け取るのみでこと足りるわけではない。ところが當時、「主命題を自身のものにする——といってもそれはただしいとはかぎらない——やいなや、新理論を完全に理解し、そしてただちに適用できるように信じこむというようなことが」しばしば起る狀況であつた。そしてこの態度が、史的唯物論の把握を一面的にし、經濟的要因のみが歴史における唯一つの決定的要因だ、とい

う曲解を生んだのである。

* K. Marx: Zur Kritik der Politischen Ökonomie. Erstes Heft. [Berlin, 1859.] Moskau, 1934, S. 5. 戦後東ドイツで再刊されている。邦譯、『選集』補卷3。

エンゲルスはこの誤りに對して次のように答えている。上部構造のさまざまな要素、政治・法律狀態や諸イデオロギーもまた歴史的闘争の經過に作用をおよぼす。「そこにはこれらすべての要素の交互作用があるのであつて、そのうちにあつて、けっきょくこれらすべての無數の偶然性……のなかをつうじて、必然的なものとしての經濟的運動が自身を貫徹する。そうでなければ、理論を任意の歴史時代に適用するのは、簡易な一次方程式をとくよりもずっと容易なことであろう。」と。さらにこの理論を間接にではなく、直接マルクスや自分の原典について研究することが必要である、と要請して、「マルクスは、この理論が一個の役割をえんじないようなものを、書いたことはなかった。」と述べている。エンゲルスは、マルクスが史的唯物論を「實際的に適用」して、歴史の中で「必然的なものとして經濟的運動が貫徹する」ことを明らかにしたその仕事自身の中に、學びとることが必

要だというのである。

マルクスがその時代の中に生きて、いかにしてその思想を作り上げてきたか、その活動の生々とした状況に學ぶことによって、私たちはマルクスの思想や理論の公式的把握態度におち入る危険をつねに克服してゆかねばならないであろう。刊行された著作のみではなく、マルクスの手紙や草稿が次第に公表されて、初期マルクスの研究が促進され、あるいは、かれの「經濟學批判」體系がその形成にそくして研究を深められつつある。これらはいずれも右のような意味での主體的把握をうながしている。そこで問題となっている二三の問題をとりあげよう。

* マルクスとエンゲルスの著作は、第二次大戰前、ドイツ語全集として出版されつつあった。

Karl Marx / Friedrich Engels: Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Im Ausgabe des Marx-Engels-Lenin-Institut Moskau herausgegeben von D. Rjazanov. Frankfurt a. M. 1927—35.

この全集の第一部 Erste Abtheilung は著作をよくみ、第一巻から第六巻までで、一八四八年までの著作・手紙・ノートがふくまれている。第三部は兩人の往復書簡集で全四巻である。(以上の他、第一部著作の第七巻および補巻一冊

が出版されているが、私はまだ見ることができていない) 第一部第三巻以下および第三部第四巻は V. Adoratski の編さんになる。この全集は以上の一二巻(一二冊)までで戦争のため中絶した。戦後、東ベルリンの Dietz Verlag から、個々の文獻が、

Bücherei des Marxismus-Leninismus

として刊行され、入手しやすくなったし、昨年から、ロシア語譯全集第二版によるドイツ語全集版が出版されている。

Karl Marx / Friedrich Engels: Werke. Bd. I. Berlin, Dietz Verlag, 1957.

この巻は一八四四年までの主要文獻である。邦譯には『マルクス・エンゲルス全集』全二七巻(三〇冊)別巻一冊、改造社、一九二八—三三年、および『マルクス・エンゲルス選集』全一八巻、補巻五冊、大月書店、一九四九—五二年、があり、個々の文獻は、それぞれ各種の邦譯がある。マルクスとエンゲルスの著作目録について比較的新しいものに、

Maximilien Rubel: Bibliographie des oeuvres de Karl Marx. Paris, 1956.

フランス語譯に詳しい。エンゲルスのものも巻末にふくまれている。

マルクスとエンゲルスの傳記については、著名なもののみをあげるにとどめる。

F. Engels: Karl Heinrich Marx. in „Handwörter-

buch der Statswissenschaften." 1. Aufl. Bd. IV. Jena, 1892. 邦譯『選集』第一七卷。

B. И. Ленин: Карл Маркс. 1914. Deutsch übersetzt, W. I. Lenin: Karl Marx im „Sämtliche Werke," Bd. XVIII. 1929. 邦譯『マルクス＝エンゲルス＝マルクス主義』國民文庫、第一冊。

右のエンゲルスの論文には、マルクスの刊行著作目録がふくまれ、レーニンの論文には、マルクスの著作およびマルクス主義文献の目録がふくまれている。

Franz Mehring: Karl Marx. Geschichte seines Lebens. 1. Aufl. 1918, 4. Aufl., Leipzig, 1923. 栗原佑譯『カール・マルクス——その生涯と歴史』二卷、大月書店、一九五三年。

Д. Ризанов: Карл Маркс и Фридрих Энгельс. 1932. 長谷部文雄譯『マルクス・エンゲルス傳』岩波文庫。

(私は原著をまだみてゐない。)

B. И. Ленин: Фридрих Энгельс. 1896. 邦譯『レーニン全集』第二卷。(私はこの原文をまだみることができてゐない。)

G. Mayer: Friedrich Engels: eine Biographie. I. Bd. 1820—51. Berlin, 1920. Ergänzungsb. Berlin, 1920. Engl. tr. ed. G. D. H. Cole. N. Y. 1936.

マルクスの年譜には、

Karl Marx: Chronik seines Lebens in Einzeldaten. Marx-Engels-Institut, Moskau, 1934. ロシア語版から

の邦譯、廣島定吉譯『マルクス年譜』改造社、一九三五年。(私は原書をまだみていない。)

二

マルクスはボンとベルリンの大學で法律學を専攻したが、勉強の中心は、歴史と哲學であつた。とくにヘーゲル哲學を學び、その批判的發展を目指していた左派のグループに加わつた。卒業後(一八四二年)の活動は『ライン新聞』への共働^{*}からはじまる。この新聞は一八四二年一月からライン地方の急進ブルジョアによって刊行され、プロシア政府の反動政策への批判を目指していた。

はじめ論文を寄稿していたマルクスはこの年十月からは主筆となつてケルンにうつり、翌年三月辭任にいたるまで、その中心となつて活動した。當時マルクスはなおヘーゲル法哲學を基底にもつて、現實を見ぬき、民主主義を目標としていた。だが現實の政治的闘争の中で、マルクスは自らの學んだヘーゲルの社會哲學が現實と矛盾することを、はっきりと自覺するにいたつた。このマルクスの思想展開を促進するにいたつた現實には、とくに、ライン地方の資本主義化によつてもたらされる貧困化

〔材木盜伐法〕の討議、モーゼル地方のぶどう栽培農民の窮状の問題があり、また、すでにフランス社會主義・共產主義の影響がドイツに及んできている、という狀況があった。マルクスは、このような現實と思想に對決するためには、まず自らの基準たるヘーゲル法哲學を檢討してゆかねばならなかった。

* 『ライン新聞』(Die Rheinische Zeitung)への寄稿論文は、新しいドイツ語『全集』第一卷にふくまれてゐる。邦譯は『全集』第一・二卷、および『選集』補卷4、にある。マルクスは經濟學研究の過程を自ら、『經濟學批判』(一八五九年)の序言で語っている。K. Marx: Zur Kritik. SS. 3—7. 邦譯『選集』補卷3、一—六ページ。

新聞辭任の後、結婚してパリに移り、『獨佛年誌』(一八四四年)刊行までの時期に、マルクスは、この批判を理論化してゆく。^{*}その方法は、宗教批判から唯物論へとすすんでいったフォイエルバッハから學んだのであった。ヘーゲルが絶對的理念の客觀化とした國家が、むしろ現實においては決してその合理的性格をもたず、國家と市民社會とは分裂と對立の關連にある。フォイエルバッハが宗教について人間と神との、主語と述語との顛倒を明らかにしたように、マルクスは、政治的社會の中で

は、國家ではなく市民社會が規定的な要素であるとして、ヘーゲル法哲學の全面的な顛倒をはじめにいたる。人間は現實の市民社會、私有財産制度のもとで分裂し、私利を追求して互に闘う個人である。その人間的本質たる類生活はただ空想的に國家に外在化されているにすぎない。その疎外をおわらせ、人間本質を現實に回復するためには、私有財産制度の廢止による外はない。その主體はプロレタリアートである。『獨佛年誌』において、はじめてこのような政治的・哲學的觀點からの結論が明白に示されるにいたつたのである。

* 『ヘーゲル法哲學批判』(Kritik des Hegelischen Staatsrechts (§§ 261—313))と呼ばれるノートが、この期間のはじめ、一八四三年夏にかかれ、ここでヘーゲル法哲學の國家についての各項を書きうつし、一つ一つ詳細な批判が加えられている。ドイツ語の新『全集』第一卷、邦譯『全集』第一卷。

『獨佛年誌』(Deutsch-Französische Jahrbücher)は、マルクスとルーゲの共同で一八四四年二月、第一・二號合併號が一冊刊行されて、中絶した。この號には、マルクスのルーゲあての手紙三通の他、『エダヤ人問題によせて』(Zur Judenfrage)『ヘーゲル法哲學批判』序説(Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, Einleitung)

の二論文がのせられている。新しいドイツ語『全集』第一卷、邦譯『選集』補卷4、參照。

マルクスはヘーゲル社會哲學を身につけ、それをもって現實の政治・經濟社會での闘争をすすめる、その缺陷を内面から感じ、これを克服してくる。だが、この新しい革命的思想をより深く基礎づけるためには、分裂と對立の現實の市民社會、私有財産制度の分析が必要である。

こうしてマルクスの經濟學研究がはじめられる。その手びきとなったのはエンゲルスの論文『國民經濟學批判大綱』（『獨佛年誌』一八四四年にのった）であった。^{*}エンゲルスもまた、マルクスとは獨立に、ヘーゲル哲學を學び、左派の青年ヘーゲル學派にぞくしてその批判をすすめる、とくにイギリスの現實の狀況に直接相接して、共產主義思想に入っていた。經濟學の全面的批判をこの論文でおこない、市民社會の非合理性・非人間的性格を明白にばくろして、私有財産廢止の歴史的必然性を示した。

^{*} Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie. in „Werke“ Bd. I. SS. 499—524. 邦譯『選集』補卷5。

マルクスは、この論文を手びきに、古典派經濟學を學び抜すいノットをとり、經濟學批判にもとづいて、自ら

の體系を書きしるしている。この一部が『經濟學・哲學草稿』（一八四四年四月—八月執筆）として知られている。^{*}

マルクスは、この手稿の中で、古典派經濟學の批判的檢討からはじめ、勞働過程の分析によって、人間の本質的把握にいたり、そこで從來までの自らの思想を根本的に基礎づけようとするのである。

^{*} Zur Kritik der Nationalökonomie mit einem Schlusskapitel über die Hegelsche Philosophie. (Ökonomisch-philosophische Manuskripte). in „Gesamtausgabe.“ Abt. I. Bd. 3. SS. 29—172. 邦譯『選集』補卷4。
この手稿は右の全集版ではじめて公表され、初期マルクス研究を促進した重要な手稿であった。

古典派經濟學は、私有財産の人格的本質が勞働にあることを見ぬいた。しかしその勞働の產物たる私有財産にいつさいの支配をゆだね、人間自らが商品となっている私有財産の諸々の法則を記述している。だがなぜ、市民社會でのこの勞働が、私有財産と對立しているのか、を説明していない。なぜ説明しえないのか。ここでマルクスは人間の本質にふれて、勞働過程を分析し、「疎外された勞働」の概念をつかみ、これによって古典派經濟學を批判するばかりではなく、從來自ら歩んで到達した共產

主義思想を人間の本质から規定づけることができるにいたったのである。

自然の一部分である人間は、自然に働きかけ、それを自己の非有機的肉體とすることによって、たえず生活をすすめる。この労働、生産的活動、しかも自由な意識的行爲としての人間の活動、これこそが人間の本质、類的存在としての人間の確證なのである。だが、現實の市民社會においては、人間はその労働の對象・生活手段としての自然を疎外され、自己の生産活動を意識的に目的としてではなく、自己には疎遠な生産活動として行ふ。こうして市民社會での労働は、人間の本质たるその類的存在から人間を疎外してしまうのである。この「疎外された労働」の産物が私有財産なのであり、労働者とは疎遠な、敵對的な、強力な對象として對立し、その生産物の所有者の手に入るのである。

そこで、このような人間の自己疎外態としての私有財産の積極的揚棄である共産主義は、はじめて人間の本质——自然と人間との實踐的な結合——を現實的に獲得することと規定されるにいたる。

以上のようにしてマルクスは、市民社會の分析を古典

派經濟學に學びながら、そこにおける矛盾の深い原因をさぐり、人間の本質を労働過程に見ることによって、「疎外された労働」という基本的觀點から、市民社會・私有財産制度における對立と矛盾を規定しえたのである。この觀點は、フォイエルバッハの唯物論——人間の宗教的疎外の分析——から學んできており、その唯物論的立場からマルクスは、現實的・社會的生活過程での労働の疎外として、人間の本質的規定にまで深めてゆく。

こうして生産的活動こそ現實の人間的存在であり、宗教・國家等は、その生産の特殊のあり方であり、それによって規定されている。そこでこの現實的な經濟的疎外の揚棄は、一さいの疎外態揚棄の基底である。このようにしてマルクスは、史的唯物論に到達してくるのである。

マルクスは『草稿』でのこの研究を體系的にすすめる前に、當時のドイツ・フランスの小ブルジョア的社會主義思想の批判を必要と考へた。一八四五年春以來、エンゲルスとの共同のもとに、この批判の仕事がすすめられる。^{*}『草稿』での史的唯物論の觀點は、市民社會での私有財産と労働の對立を中心としていたのであるが、さらに

生産力と生産関係との関連として歴史の一般的な發展の把握にまですすめてゆき、史的唯物論を定式化するのである。前節にみたその定式は、このような歩みの結果として生み出されてきたものである。

* エンゲルスはこの年の春「イギリスにおける労働者階級の狀態」(Die Lage der Arbeitenden Klasse in England, im „Gesamtausgabe.“ Abt. I. Bd. 4. SS. 7—285. 邦譯『選集』補卷2)を刊行した。マルクスとエンゲルスの共同による著作は『神聖家族』(一八四五年)(Die Heilige Familie, im „Gesamtausgabe.“ Abt. I. Bd. 3. SS. 173—388. 邦譯『全集』第一卷「一部譯『選集』補卷5)『イッ・イデオロギー』(一八四五—四六年執筆、全體が公表されたのは次の全集版によつてである。)(Die Deutsche Ideologie, im „Gesamtausgabe.“ Abt. I. Bd. 5. 邦譯「ナウカ社刊」三冊、一九四六—四七年「一部譯『選集』第一卷。『共産黨宣言』(一八四八年)(Manifest der Kommunistischen Partei, im „Gesamtausgabe.“ Abt. I. Bd. 6. 邦譯『選集』第二卷)。この一八四八年の民主主義革命にいたる時期の、マルクスの著作には、次のものがある。『哲學の貧困』(一八四七年)(Misère de la Philosophie, 邦譯『選集』第一卷)『フイエールバッハに對する十一のテーゼ』(一八四四—五年執筆)(Thesen über Feuerbach, im „Gesamtausgabe.“ Abt. I. Bd. 5. 邦譯『選集』第一卷)『賃労働と資本』(一八四七—八年執筆)(Lohnarbeit

und Kapital, im „Gesamtausgabe.“ Abt. I. Bd. 6. 邦譯『選集』第二卷)

マルクスは、はじめヘーゲル哲學から出發し、現實の市民社會における矛盾と對決し、その分析を深めるために、フイエールバッハの唯物論・フランス共産主義・イギリス古典派經濟學を次々に學びとりつつ、それらの提起する問題とその解決を根底で批判しながら、自らの思想と理論を史的唯物論として作り上げてくる。私たちは、かれのこの現實社會への實踐的な對決と、その思想の深化を、その個々の契機をたどりながら、内面的に追求してゆかねばならないであろう。

一九三〇年代に、前掲のように多くの手稿が公表されて、初期マルクスの研究が促進されてきている。とくに『經濟學哲學手稿』は、マルクスがはじめてその思想を根底的に確立した轉機にしろされたものとして注目され、その中心觀點たる「疎外された労働」の概念が重要視せられてきている。マルクスはそこで、人間本質を實踐的な労働の過程として把握ることによって、史的唯物論とともに、唯物辯證法をも確立している。自然と人間を媒介するこの労働の唯物論的把握をもって、マルクス

は、ヘーゲル辯證法の積極的意義——自己疎外による自己獲得——を評價すると同時に、その觀念論的把握をも批判するのである。ヘーゲルの初期の草稿がマルクスのそれと平行的に發表されることによって、ヘーゲルにおける辯證法成立の経過が研究せられるとともに、そのマルクスとの對比がすめられている。ヘーゲル辯證法とマルクスのそれとの同一性と差異の問題は、史的唯物論、さらにマルクスの經濟學の方法や『資本論』の體系的理解にとって重要な意味をもっている。さらに、私たちは、初期マルクスの思想の展開の中で、主體たるプロレタリアートの把握についてのフランス共產主義・社會主義の影響、古典派經濟學のせつ取とその理論化、等、理解を深め、追求をすすめてゆかねばならないのである*。

* 初期マルクスについて

F. Engels: Herrn Eugen Dühring Umwälzung der Wissenschaft. 1878. 4. Aufl. 1894. 邦譯『反ドゥーリング論』『選集』第一四卷。

F. Engels: Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie. 1886. Berlin, 1952. 邦譯『ルードヴィヒ・フョーエルバッハとドイツ古典哲學

の終結(フョーエルバッハ論)』『選集』第一五卷。

W. I. Lenin: Aus dem Philosophischen Nachlaß. Berlin, 1949. 邦譯『哲學ノート』岩波文庫。

K. Löwith: Max Weber und Karl Marx. in „Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik“. Bd. 67. 1932. 邦譯『カール・レーヴィント『ウェーバーとマルクス』一九四八年。

Georg Lukács: Der junge Hegel. Berlin, 1954. 出口勇藏編『經濟學と辯證法——ルカーチのヘーゲル研究』一九五六年。

Auguste Cornu: Karl Marx und die Entwicklung des modernen Denkens. Berlin, 1950. 邦譯『ホルミット著、青木靖三譯『マルクスと近代思想』一九五六年。

Auguste Cornu: Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werke, Bd. 1. (1814—1844). Berlin, 1954. (卷末に詳細な文獻目錄がなされている)

И. И. Розенберг: Очерки развития экономического учения Маркса и Энгельса в сороковые годы XIX века. Москва, 1954. ロゼンベルグ著、副島種典譯『初期マルクス經濟學說の形成』一九五七年。

向坂逸郎『經濟學方法論』(第一分冊)一九四六年。

田中吉六『史的唯物論の成立』一九四八年。『マルクス理論の解明』一九五二年。

城塚登『社會主義思想の成立——若きマルクスの歩み』一九五〇年。

淡野安太郎『初期マルクス——唯物史観の成立過程』一九五六年。

大野精三郎「ヘーゲルにおける古典派経済學の把握」『經濟研究』第七卷第四號、一九五六年一〇月。

「ヘーゲルと古典派經濟學」〔調査〕『經濟研究』第八卷第三號、一九五七年七月。(文獻目録がふくまれている。)

杉原四郎『ミルとマルクス』一九五七年。

なお、ヘーゲルと對比しての『資本論』の辯證法的理解に關してはさらに、

武市健人『ヘーゲル論理學の世界』一九四八年。

遊部久藏『價值論と史的唯物論』一九五〇年。

北川宗藏『經濟學方法論』一九五四年。

M. M. Pocertrah: Bonpocb [Идеология в "Капитале" Маркса.] Москва, 1954. ローゼンタール著、飯田貫一譯『資本論の辯證法』上・下、一九五六年。

三

マルクスはこの史的唯物論をみちびきの絲として、生産力と生産關係のより詳細な分析を、資本主義經濟社會において確證してゆく。すでに一八四〇年代の研究において、古典派經濟學の批判的研究が重要な土臺となっていたのであるが、一八五〇年のロンドン亡命とともに、再び全面的にそれをすすめ、『經濟學批判』『資本論』第

一卷として自ら發表した他に、多くの草稿をのこした。それらは、エンゲルスによって『資本論』第二卷・第三卷として刊行され、第四卷に當る『剩餘價值學說史』はカウツキーの手により發表されたのである。

* Karl Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie. Erstes Heft. 1859. Moskau, 1934. 邦譯『選集』補卷。

* Karl Marx: Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Bd. 1. 1867. Bd. 11. 1885. Bd. 111. 1894. Berlin, Dietz Verlag, 1956. 邦譯『高島素之譯、長谷部文雄譯(青木文庫)』向坂逸郎譯(岩波文庫)。

*** Karl Marx: Theorien über den Mehrwert. 3 Bde. hrsg. von K. Kautzky. 1905—10. 邦譯『全集』第八—十卷。長州譯(國民文庫)。カウツキー版といふのは、マルクスの手稿を再現した新しい版が刊行されている。Karl Marx: Theorien über den Mehrwert. (Vierter Band des „Kapitals“) 1. Teil. Berlin, Dietz Verlag, 1956. 邦譯『長谷部文雄譯、第一卷、青木書店、一九五八年。

マルクスが自らの經濟學の體系を構想してその定式をしるしている最初は、『經濟學批判』のための準備ノートたる『經濟學批判綱要』の『序説』*においてである。

* 一八五七年に執筆されたこれらのノートの Karl Marx: Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, hrsg. von Marx-Engels-Lenin Institut, Moskau,

1939-41. Berlin, Dietz Verlag, 1953. として發表された。その『序説』(Einleitung)は、有名な、「經濟學の方法」をしるしたものをふくみ、『經濟學批判』邦譯『選集』補卷3に邦譯されている。

この『序説』の後、『批判』刊行の一八五九年にいたるまで一連のプランがのこされている。その内容を要約すると、

一、資本、a、資本一般(一、商品、二、貨幣、三、資本一般(生産過程、流通過程、兩者の統一あるいは資本と利潤、利子))

b、競争

c、信用

d、株式會社

二、土地所有

三、賃労働

四、國家

五、國際貿易

六、世界市場および恐慌

このようなプランにそつてマルクスの研究がすすめられ、その内容が豊富化されるとともに、當初豫定してい

たプラン各項目の内容が變容されてきている。どのような経過をたどっているのであらうかを簡単にみてみよう。

一八五九年に發表された『經濟學批判』は右のプランにもとづく、「a、資本一般」の最初の序説としての二章、商品と貨幣の部分に當る。マルクスは『批判』刊行ののち、第三章に當る本來の「資本一般」完成の準備をすすめる。そして一八六二—三年の間に二三冊のノートをかきしるした。このノートの第五—一五冊がいわゆる『剩餘價值學說史』に相當する部分であるが、マルクスはそこで、古典派經濟學をいまだ一度全面的に研究しなおしている。その過程で、リカードウ地代論の疑點(絶對地代論)を解決し、競争による平均利潤率成立の法則を確立してくるのである。當時、一八六二年末ころ、マルクスはこの「地代」の分析は、「前に確立された原則の説明」として、なお「資本一般」のうちで説明されるものと考へていた。また「競争」の分析が同じころの第三卷のプランのうちに示されていることをみれば、これもお「資本一般」のうちにおいて限定された意味で加えられたと見られる。

この二三冊のノートをしるした後、マルクスはなお第三卷のための研究をつづけ、一八六五年末までにほぼ『資本論』全三卷の原稿が作り上げられる。その上で一八六六年一月から第一卷の原稿の清書がはじめられ、一八六七年四月完了。九月出版のはこびとなる。マルクスはその死（一八八三年）にいたるまで、第一卷の改訂（第二版は一八七二—一八七三年、フランス譯は一八七二—一八七五年）や、續卷のための研究をつづけている。『資本論』への序文中でのエンゲルスの編集についての説明によれば、第二卷のための草稿は多く、一八七〇年代にぞくし、第三卷の草稿は、大部分一八六四—一八六五の草稿からなっていることが分る*。

* この「經濟學批判」體系のプランについては、前掲のマルクスの著作の外、その手紙をも参照。Karl Marx / F. Engels: Briefe über „Das Kapital.“ Berlin, 1954. 岡崎次郎譯『資本論に關する手紙』上・下。

そこで以上のようにみると、現在の『資本論』三卷の内容は、一八六三年以降の執筆になるものである。前述のように、一八六二年末までは、マルクスはなお「地代」「競争」の分析を「資本一般」の範囲内で限定的にふれ

る豫定であつた。問題はそれ以後、現行『資本論』にみられるように「競争」「信用」「地代」「賃賃」の分析がその中に加えられてくるとともに、「資本一般」の分析が内容をより豊富にしてきているという點にある。

この内容の擴充によつて、すでに「資本」「土地所有」「賃労働」という「近代ブルジョア社會が分れているところの三大階級の經濟的生存條件」が解明されているとすれば、現行の『資本論』全三卷は、前述のように、プランの第一部門「資本」中の「資本一般」ではなく、プランの前半三部門がすでに解決された、と解しえられることになる。他方、その内容擴充がいまだなお「資本一般」の範囲内で行われたものと考えれば、「資本主義的生産様式の内部組織のみを、理念的平均において」示していると考え、「競争」「信用」「賃労働」「土地所有」はなお、別個の特殊理論においてはたされるべきだ、と把握することができる。

このように「資本論」三卷が、プランのどの位置に限定せられるかの問題について、その経過の上から、内容の擴充がみられるにしても、なお理論的に考察するとき、「資本一般」に當るか、「資本」「土地所有」「賃労働」

という三部門を含むものに相當するか、が二つの見解として提示されてくる。^{*}

* 「資本一般」説については、

久留間敏造『恐慌論研究』新評論社、一九五三年。

杉本榮一『近代經濟學の基本性格』日本評論社、一九四九年。

を、「三部門」説については、

宇野弘藏『價值論の研究』一九五二年、『社會科學のため』一九五二年、『恐慌論』一九五三年、を参照。

問題は、さらに、残された分野の研究をどのようにしたすか、にある。宇野弘藏氏の見解は、その點について最も有力であつて、「資本」「土地所有」「賃労働」||三部門説をとられ、「原理論」としての『資本論』において「資本主義生産様式の内的構造」の分析ははたされ、のこされた「國家」「國際貿易」「世界市場」の把握には、上向法は適用されず、「段階論」の對象となる、とされるのである。これに對して「資本一般」説によれば、なお「特殊理論」として上向法が可能と考えるのであつて、私は、多くのマルクスの限定的な言明からして、「資本一般」説をとる。たとえば、「競争」の問題について、「需要と供給」という「二つの社會的推進力の、より深い、

ここでは適當でない分析は、全く度外視する」という言及が、第三卷第一〇章のまさしく「競争」を分析する章の中にある。このような社會的需給の變動の過程についての分析が、「資本一般」の次にくるべき「b、競争」の對象となる。すなわち、そこでは「市場價格の運動」その市場價值からの乖離と一致の現實的運動の態様を、法則化することができるのではなからうか。^{*}「信用」「地代」「勞賃」に關する『資本論』中の限定的言及も、「資本一般」の内部での把握によるものと解しうる。それぞれについての、特殊の研究ははたされたうえで始めて「ブルジョアの生産の内的構造」を具體的な運動の狀況において把握しうる。その上に立つて、國家・外國貿易・世界市場の現實的運動の理論的分析ははたされるであらう。

* 拙稿「市場價格の周期的變動と恐慌」『經濟研究』第七卷第三號、一九五六年七月。参照。

このような「經濟學批判」體系のなかで、世界市場恐慌の分析は、プランに見られるように、その最終項目であつた。私たちは、マルクスが研究の經過の中で、どのようにプランを具體化してくるか、その内容と方法を學

びとりながら、このプランの具體化を私たちの力ではか
らねばならないのである。

* この「經濟學批判」體系の問題についての文獻は、前掲
のもの外、

Henryk Grossmann: Die Änderung des ursprünglichen Aufbauplans des Marxschen "Kapitals" und ihre Ursachen. in „Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Sozialbewegung.“ Jhg. XIV. Heft. 2. 1929.

A. Leontief: Marx's Capital. tr. from Russian by E. G. Kazakevich. N. Y. 1946. 高木幸二郎譯『資本論』解説』國民文庫。

Fritz Behrens: Zur Methode der politischen Ökonomie. Berlin, 1952. 相原文夫譯『經濟學の方法』一九五七年。

Karl Marx: Theorien über den Mehrwert. 1. Teil. Berlin, 1956. Vorwort von Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der KPSU.

遊部久藏「資本論解釋學の深化と克服」『經濟評論』一九五二年十一月。

宮崎犀一「『經濟學批判』の體系と『資本論』の對象領域」『經濟評論』一九五三年四月。

佐藤金三郎「『經濟學批判』體系と『資本論』」『經濟學雜誌』第三一卷第五・六合併號、一九五四年十二月。

高水幸二郎『恐慌論體系序説』一九五六年。

宮本義男『資本論研究序説』一九五七年。

遊部久藏「『資本論』の具體化とプラン問題」『經濟評論』一九五七年十二月。(文獻目錄がふくまれている。)

四

ちょうど百年まえ、一八五八年、マルクスは『經濟學批判』のための準備ノートたる『綱要』を作り上げた年である。一八五〇年以來の亡命生活における窮迫と、子供たちの死亡。そのきびしい生活記録は、エンゲルスとの手紙のやりとりの中に、生々しくうき出されている。

私は、以上の三節で、わずかにかれの理論的問題の一部にふれたにすぎない。その生涯における政治的闘争や組合の組織的活動、ひろい文化的知識等、マルクスの思想や理論を把握するうえに、缺いてはならない要因はなお廣い。

何よりもマルクスに學ぼうとするとき、その生涯の友エンゲルスを忘れることはできない。かれの理論的研究は、マルクスを刺戟して、古典派經濟學研究の指針を與えたことはすでにふれた。マルクス一家の一八五〇年からのロンドンでの亡命生活の間、エンゲルスは、父の紡

績工場(マンチエスターにあった)で働き、マルクスの生活を支えた。一八六七年八月一六日夜半二時、マルクスは『資本論』第一巻の最後の校正を終って、エンゲルスにあててつぎのように書いている。「丁度いま最終のボーゲンを校正し終えた。……序文は昨日校正して送り返した。従ってこの巻は完了したのだ。これはひとえに君の力によるもので僕は厚く感謝する! 君の僕にたいする獻身的犠牲がなければ、僕は三巻にわたる異常な仕事をとうていなしえなかったであろう。」と。しかも、この同じ手紙においてさえ、「十五ポンド・スターリングをありがたく受けとった」としてゐるのである*。

* Karl Marx / Friedrich Engels: Briefwechsel, in „Gesamtausgabe“ Abt. III. Bd. 3. 邦譯『全集』第一九卷。

エンゲルスは一八四四年マルクスと會つてその思想の相一致を知つていろいろ、生涯にわたる共力の道を歩んで

きたのであるが、自らは、「マルクスの第二ヴァイオリン」であつたと謙遜してゐるのである。しかしマルクス死後の『資本論』第一巻第三・四版、第二巻・第三巻編集の仕事をはじめ、マルクスに相比しうる巨大な仕事をのこしてゐる。私たちは、自らの現實對決への心をこめながら、この二人の巨人を深く學びとてゆきたいと思ふ*。

* マルクスの生活について、なお二、三の文獻を加えておこう。

同時代の人たちによる回想記をまとめたものとして、Erinnerungen an Karl Marx. Berlin, Dietz Verlag, 1953. 土屋保男編譯『マルクス回想』國民文庫。

マルクス夫人の傳記としては、

Louise Dornemann: Jenny Marx. Berlin, Deutscher Frauenverlag, 1953. 越村信三郎譯『マルクス夫人傳』一九五七年。

(一九五八・二・一四)

(一橋大學助教授)